

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 4 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00646

研究課題名(和文) テキストの結束関係と語彙概念拡張

研究課題名(英文) Textual coherence and conceptual expansion of nominals

研究代表者

岡田 禎之 (Okada, Sadayuki)

大阪大学・大学院人文学研究科(人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻)・教授

研究者番号：90233329

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：一般に語彙概念拡張は、項位置にあるときに頻繁に生じ、付加詞位置では生じにくい傾向が認められるが、因果関係文脈にある付加詞では例外的に概念拡張が行われる。この点に注目して、because X構文を検討してみると、「because + 文」と「because of NP」の2つの構造のブレンディングの結果として登場してきた新形式であると結論づけることができた。この研究内容については、Cambridge大学出版社のジャーナルEnglish Language and Linguisticsに掲載され、公表されている。その後、調査過程で発見した例外的な「従属接続詞の等位接続用法」に関する調査を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

because X構文は、ブログなどの世界で広がっている新たな表現様式であるが、日本ではそれほど認知されている構文ではなく、ただの誤法であると見なされる向きもある。しかし、実際にはこの構造は十分な存在理由があるものであり、また何故それが発生し、発達してきたのか、ということについても一応の説明を与えることが可能な現象であることを明らかにした。また「従属接続詞の等位構造」という例外的な現象も、ほとんど顧みることがないものであるが、この現象の存在理由にも一応の説明を与えたことには意義があると思われる。

研究成果の概要(英文)：In general, lexical conceptual expansion is observed when lexical items are employed in argument positions of verbs, while in adjunct positions, it is not likely to be observed. However, adjuncts in a cause-effect relation is readily extended conceptually. In light of this tendency, "because X construction" can be analyzed as a result of blending of the two structures of "because + S" and "because of NP." This research is published as an article in English Language and Linguistics, which is a journal published by Cambridge University Press. After the publication, another research has been carried out on the exceptional coordinate structures employing subordinators like "because."

研究分野：意味論・語用論

キーワード：語彙概念拡張 コーパス メトニミー 因果関係 ブレンディング 従属接続詞

### 1. 研究開始当初の背景

語彙概念拡張に関しては、どのような統語環境において生産的に認められるか、という問題はほとんど論じられることがなく、Waltereit (1999)や Sweep (2009)が例外的にこの問題を考察している程度であった。両者とも直接目的語位置において語彙概念拡張が生産的に認められるという点において一致しているが、例外も多数認められることは認識されていた。筆者は、項と付加詞における非対称性、という観点からこの問題を検討してきたが、その中で付加詞位置であっても、因果関係文脈における付加詞表現だけは、例外的に語彙概念拡張の対象になることが判明し、これは Kehler (2002)が主張するテキストの結束関係の制限が関わる現象であると考えるに至った。

### 2. 研究の目的

(i)因果関係文脈において用いられる副詞句表現(付加詞表現)には、それ以外の付加詞表現とは異なり、文脈に応じた語彙概念拡張が認められることを、コーパスデータから検証していき、項と付加詞に認められる語彙概念拡張の非対称性の例外事例として認められることを確認すること。

(ii)近年ブログなどのインターネットで用いるテキストに頻繁に認められるようになった because + N/A/V などのユニット表現 (because X 構文) がどのようにして生じ、発展してきたのかをコーパスデータなどを調査することによって検証し、その成立過程を探ること。

(iii)その他の因果関係を表す付加詞表現には同様の発達過程が認められるのか、認められないのかを検証し、その理由を探ること。

(iv)because X 構文の調査の途上で発見された、因果関係を表す従属接続詞が等位接続表現として用いられる特殊な構造についてデータを洗い出し、何故このような特殊形式が認可されるようになったのか、その理由を探ること。

### 3. 研究の方法

ここで言う研究は、全て実際のコーパスから用例を検出していき、分類し、分布状況を観察することでしか検証することができないので、地道な検索、分類、整理という作業を繰り返すこととなった。

(i)に関しては、研究をスタートさせるまでの段階で、項位置と付加詞位置における名詞の拡張解釈の分布について日本語と英語でそれぞれ 30 ずつの名詞を取り上げ、それぞれコーパスデータから項位置での用例 250 例と付加詞位置での用例 250 例を集めて意味を分類し、前者における拡張解釈のバリエーションの方が広くなることを確認している。また、複合語において主要部と修飾要素のどちらの位置におかれたときに当該名詞の拡張解釈がより広く認められるか、という調査に関しても、日本語と英語で身体部位名詞 16 個ずつを取り上げてその分布を確認し、主要部位置において用いられた場合の方が拡張解釈が広くなることも確認している。つまり、項と主要部という、文または語形成における主要な参与者位置において、拡張解釈は広く認められ、その解釈の一部が、付加詞や修飾要素などの周辺の参与者においても認められるとすることが判明している。この分布傾向から判断して、新規の語彙概念拡張は、まず中心的参与者位置において認められ、それが、次第に慣習化していき周辺の参与者位置へも浸透していくという方向性が考えられる。このような一般的傾向に対して、因果関係を表す付加詞の場合 (because of, in spite of, as a result of, owing to, on account of など)、項位置にあったときにも認められないような語彙概念拡張が観察されることがコーパスデータの調査から判明した。これ以外の文脈で同様の現象は筆者が知る限りにおいては生じていない。

この例外的な分布がどうして生じるのか、その動機付けを探る必要が生じたが、筆者は Kehler (2002, 2019)が提唱する文の結束関係に理由を求めることが可能であると考えた。因果関係という結束関係の特徴は、それが「命題」間において認められるものである、ということだと Kehler は主張する。この考え方が妥当なものであるならば、because of, in spite of, as a result of, owing to, on account of などの補部に登場する名詞句は、概念上は「命題」を表すものであるはずだ、ということになる。ここには意味と形式の不一致が生じていることになり、その不一致を解消するべく、語彙概念拡張を行うことで命題解釈に至る必要性が生じる。このことが、因果関係文脈に生じた名詞句の概念拡張を発動する動機付けであると考えられる、とした。

(ii)に関しては、Bergs (2018)が because +A(形容詞)の組み合わせが because X 構文の最初の事例であると考えたことに対して、そうではなく、because +NP という構造が最初に登場したのではないかと考えた。because +A は確かに古くから存在しているのだが、事例を確認していくと、従属節に広く認められる、「(主節要素と同一の)主語と be 動詞の削除」の事例ばかりが認められており、このような予期できる範囲を超えた because X 型の表現はむしろ近年に至るまで見つかりにくい。because X に見られるような破格な構造は、補部が名詞である場合に古くから認められることが、OED (Oxford English Dictionary)の because を含む事例 1 万例強からの分布として明確に表れてくる。他にも、COHA (Corpus of historical American English)

や GloWbE(Corpus of Global Web-based English)における用例を確認すると、OED における分布特性と同様の傾向が認められることが判明した。また、OED から、当初は補部要素は裸の名詞(N)ではなく、名詞句(NP)が登場していたことも分かったので、NP から N や A や V などの他のカテゴリーに拡散していったのではないかと考えた。

このような実際の分布状況から、筆者はブレンディングによって because X という新形式が登場したのではないかと考えた。because は文を補部としてとる場合と、前置詞 of を介在させて NP を補部にとる場合があるが、この両方が融合することによって新しく登場したものが because NP という構造だったのではないかと考えるに至った。元々、because of NP の NP は、(i)で見たように概念的には「命題」を表し、その参照点として機能する要素である。because S は統語的に「命題」を補部としたものであるのに対して、because of NP は、概念的に「命題」を補部にしている表現であることから、両者が融合することによって新しい構造が生じた、と考えることは、突拍子もないものではないだろうと思われる。ここで重要なことは、新しく生じた構造において、補部が NP でなければならないという統語的制限は消失する、ということである。「命題」の参照点になる要素が、名詞句でなければならないのは、前置詞 of が存在するからである。しかしブレンディングによって of が消失すると、NP というカテゴリーに参照点要素が制限されなければならないという理由はなくなり、参照点として機能する要素であれば、どのようなカテゴリー要素であっても、この位置に登場することが可能になる。その結果、N や A や V など、様々なカテゴリーの要素が登場することになり、現在の because X 構文が確立するに至った、と結論づけた。

(iii)because 以外にも、因果関係を表す付加詞表現はいくつもあるが、他の表現に関しては because と同様の発展は認められないのか、という点もコーパスを利用して確認していった。in spite X, as a result X, owing X, on account X などの構造は生じていないのかどうかを確認する上で、この種の破格な表現は主にブログなどのネット分野での使用に多く認められることから、GloWbE と NOW(News on the Web corpus)というネット英語を集めたコーパスを検索してデータを集めていった。またこれらのコーパスは20カ国の英語表現を集めており、because X が南アジアや東南アジアに多く認められる表現であることから、広く多くの国で用いられている英語表現から収集する必要があると考え、これらのコーパスを利用することとした。ここで興味深いのは、in case X という構造の存在である。この構造はそれほど頻度が高くないが、しかし、N, A, V などの様々なカテゴリーの要素が補部に登場する形が検出されてくる。その他の因果関係の表現に関してはこのような特徴は認めにくい(ブログなどの英語なので、補部に A や V が登場する事例は確かにあるのだが、そのような場合、周りの英語表現もミスが多く、かなり大きく崩れている。周りの英語表現には大きなミスはなく、因果関係の付加詞の補部要素のカテゴリーだけが破格な形になっているような事例を見つけることは、because/in case 以外の表現に関しては、非常に困難であった)。

これは何を意味しているのか、ということであるが、in case という表現も、補部に文を取る構造と、of という前置詞を介在させて NP 補部をとる形式の2つが存在しており、ブレンディングによって新たな形式 in case X を成立させることが可能な条件が整っているということが重要である。しかも、使用頻度から見て、because of の次に頻度が高い因果関係表現は、as a result of、その次が in spite of であり、owing to/ on account of などが後続するが、少なくとも in case of は because of につぐ頻度をもった付加詞表現ではない、ということである。良く用いる表現に変化が生じやすいことは、頻度効果の一つとしてよく知られていることであるが、単に使用頻度が高い付加詞表現に変化が生じていくのであれば、because X の次に生じるべき破格構文は、as a result X/ in spite X などであり、in case X ではないはずである。また、これらの破格構文が仮に単なる「言い間違い」によって生じたのだとしても、やはりそのような「言い間違い」は使用頻度の高いフレーズに優先的に生じるはずであり、使用頻度の高い表現を飛ばして使用頻度の低い in case of に生じてくる、ということは考えにくいはずである。もしそのように考えて良いのであれば、これは使用頻度による変化ではなく、新しい構造を生み出すことになる入力構造の存在、が鍵になっている構文である、と結論づけることができる。そして、このことは、(ii)の検証における because X の成立過程に関する仮説を補強する事実にもなると考えられる。

(iv)because X 構文の調査を行う過程において、珍しい構造として、because が形容詞同士を等位接続するために用いられており、その全体が後続する名詞を修飾している、という形式が少なからず存在した。このような破格な構造は though/if などの表現には存在することが辞書の記述などでも確認できる(a kind though stern teacher などの用例)。例外的な等位接続構造とされるものである。しかし because に関しても同様の構造が少なからず存在している。筆者が見た限りの辞書類にはこのような用法は記載されておらず、一般的に認知されている用法では無いようである。しかし用例は確実に存在しており、一方で時間関係の接続詞 when/before/after などには、これまで筆者が確認したところでは、認められない用法であると考えられる。何故このような破格な構造が認可されるのか、という問題を考察しているのが現状である。今のところ3つの要因を考えている。一つは、(ii)に認められた因果関係という関係性の問題である。形容詞が等位接続されるだけであっても、因果関係的な接続表現が用いられることによって、「命題」的な内容に還元して解釈する必要があるのであれば、適切な解釈を得るためのヒントが従属接続詞を用いることによって示されていることになり、そのヒントを

利用して言語使用者は適切な解釈にたどり着くことができると考えることができるだろう。二つ目は、前置修飾形容詞が持つ「永続的、本質的特性」を表すという傾向と、因果関係は整合するという点である。これは特に時間関係の接続詞の場合と比較して分かることであるが、when/before/afterなどの接続表現は後続する属性が「時間的に制限されている」ことを示すので、前置修飾構造にこのような表現が用いられると、この位置において用いられる形容詞類が持つ「永続的、本質的」傾向とは整合しなくなる。これに対して、因果関係には時間的な制限はなく、「永続的、本質的」な属性が原因や結果として生じることはあり得る。つまり、因果関係の接続詞が前置修飾要素に組み込まれていったとしても、何も矛盾する事態は起こらないということであり、この点で問題は生じないと考えられる。三つ目は、因果関係と等位接続の持つ親和性である。等位接続詞 and/butなどは、and therefore, and as a result, but against expectationなどの因果関係的な解釈で用いられることがあり、そもそも因果関係解釈と等位接続構造は、近接性を持った関係であると言える。これに対して、時間関係と等位接続構造は関係性がかなり制限されており、言語類像性にしがたがった、時間的順序に従った等位項の配列、という解釈以外には認めにくいとされている。つまり表しうる表現のバリエーションが最初から制限されており、and thenの解釈以外に広がっていくことがなく、別の接続表現を用いる動機付けがない、ということになる。

このような特徴の違いは、因果関係の接続表現が等位構造に用いられることが容易となり、これに対して時間関係の接続詞が等位構造に適用されることが困難となることの要因と考えることができるかもしれない。しかし、これらの要因が妥当なものと言えるかどうか、他の言語において同様の観察が当てはめられるのかどうか、など不明な点が多くあり、今後調査を続けていく必要がある問題である。また、従属接続詞は文を補部にとり、等位接続詞は文以外にも、語や句を補部にとることが可能である、という両者の区別は果たして有効なものかどうか、という疑問もわいてくる。等位接続とは何か、従属接続とは何か、という問題を考える上でも、重要な問題となり得るので、今後他の言語についての調査も行いながら考察していく予定である。

#### 4. 研究成果

この期間内の執筆論文は9編、研究発表はコロナウィルスの影響で学会が取りやめになったことなどもあり、2件のみであった。語彙概念拡張の問題に関連する論考は、(3)~(9)である。その中でも、(i)に関わる成果は(3)~(5)、(ii)に関わるものは(6),(7)、(iii)に関わるものは(6)、(iv)に関わるものは(8),(9)である。研究発表に関しては、2件とも(ii)(iii)に関するものであった。

#### 論文

- (1) 「認知言語学は言語普遍性、個別言語の特殊性をどのように考えるのだろうか？」『認知言語学とは何か？』157-176. 東京：くろしお出版. 2018.6.1
- (2) 「英語の補文形式と事態の統合について」『英語学を英語授業に活かす—市河賞の精神(こころ)を受け継いで—』(語学教育研究所) 158-176. 東京：開拓社. 2018.9.25
- (3) “Nominal Conceptual Expansions in Predicational and Modificational Contexts.” *OUPEL* 19: 125-149. (大阪大学大学院文学研究科英語学研究室論集) 2019.12
- (4) 「因果的結束関係を表す副詞句と語彙概念拡張」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第60号. 1-40. 大阪大学大学院文学研究科. 2020.3.25
- (5) 「因果関係の副詞句における概念拡張と of の脱落について」『英語学の深まり・英語学からの広がり』阪大英文学会叢書 10. 120-131. 東京：英宝社. 2020.3.30
- (6) “Category-free Complement Selection in Causal Adjunct Phrases.” *English Language and Linguistics* 25/4: 719-741. Cambridge: Cambridge University Press. (Published on-line on 8 September 2020, and in printed version in winter 2021)
- (7) 「Because X 構文の歴史の変遷について」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第61号. 23-47. 大阪大学大学院文学研究科. 2021.3.22
- (8) 「因果関係を表す接続詞に見られる等位構造」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第62号. 73-95. 大阪大学大学院文学研究科. 2022.3.22
- (9) 「日本語における因果関係接続表現による等位構造の認可について」『待兼山論叢』第56号. 33-58. 文化動態論篇：大阪大学文学会. 2022.12.25

#### 研究発表

- (1) “On the rise of truncated causal adjuncts in English.” The 15th International Cognitive Linguistics Conference, Kwansai Gakuin University, Japan, 2019.8.10
- (2) 「因果関係の副詞句における新規表現の発展について」(筑波大学言語学講演会(科学研究費 基盤 C「日英語におけるデフォルト志向性と構文の機能」講師として)(筑波大学人文社会科学部研究科) 2019.12.19

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Sadayuki Okada	4. 巻 25/4
2. 論文標題 Category-free Complement Selection in Causal Adjunct Phrases	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 English Language and Linguistics	6. 最初と最後の頁 719-741
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1360674320000295	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 岡田禎之	4. 巻 62
2. 論文標題 因果関係を表す接続詞に見られる等位構造	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 73-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡田禎之	4. 巻 61
2. 論文標題 Because X構文の歴史的変遷について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 23 - 47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Sadayuki Okada	4. 巻 19
2. 論文標題 Nominal Conceptual Expansions in Predicational and Modificational Contexts	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Osaka University Papers in English Linguistics (OUPEL)	6. 最初と最後の頁 125-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡田禎之	4. 巻 60
2. 論文標題 因果的結束関係を表す副詞句と語彙概念拡張	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡田禎之	4. 巻 10
2. 論文標題 因果関係の副詞句における概念拡張とofの脱落について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語学の深まり・英語学からの広がり (阪大英文学会叢書)	6. 最初と最後の頁 120 - 131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田禎之	4. 巻 1
2. 論文標題 認知言語学は言語普遍性、個別言語の特殊性をどのように考えるのだろうか?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『認知言語学とは何か?』 (くろしお出版)	6. 最初と最後の頁 157-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田禎之	4. 巻 1
2. 論文標題 英語の補文形式と事態の統合について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『英語学を英語授業に活かす--市河賞の精神 (こころ)を受け継いで--』 (開拓社)	6. 最初と最後の頁 158-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田禎之	4. 巻 56
2. 論文標題 日本語における因果関係接続表現による等位構造の認可について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 待兼山論叢 文化動態論篇	6. 最初と最後の頁 33-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Sadayuki Okada
2. 発表標題 On the rise of truncated causal adjuncts in English
3. 学会等名 15th International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田禎之
2. 発表標題 因果関係の副詞句における新規表現の発展について
3. 学会等名 筑波大学言語学講演会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------